

1. こんばんは。岩本です。安倍首相は、バルト三国を外遊中、リトアニアの杉原千畝記念館を訪問しました。今日は、杉原千畝さんをめぐって私が少し考えたことをお話ししたいと思います。それは、ナチスのアウシュビッツなどの絶滅収容所の責任者たちが権威に対してどのような態度をとったか、そして、杉原千畝さんに代表される、ナチスに抵抗した人たちが権威にどう向き合ったかということです。
2. 絶滅収容所の責任者たちは、権威は権威であるという理由で、無条件に権威からの命令に従いました。命令について一切の倫理的判断を停止しました。その典型が、ユダヤ人を絶滅収容所へと移送する責任者であったアイヒマンが、戦後のイスラエルの裁判でとり続けた態度です。アイヒマンは裁判で、「ただ命令に従っただけである」と弁明しました。この裁判を傍聴した、政治哲学者ハンナ・アレントは、アイヒマンのような人たちを「悪の凡庸さ」と評しました。ホロコーストという絶対的な悪に加担した、ひとりひとりの人間は、つまらないほど平凡で普通の人間であったということです。そして、普通の人間であっても、権威に盲従して、きわめて残虐な行為もいとわないということです。
3. 軍隊は、兵士たちに対して上官の命令に絶対服従することを求める組織です。自己の良心に従って自律的に判断する能力は、軍隊にとって邪魔なだけです。兵士は、権威である上官の命令に逆らってはならない。しかしそれは、その命令が後に倫理的に間違っていると批判されても、命令だから従っただけである、という「言い逃れ」を兵士に与えることになります。つまり、軍隊という組織は本質的に、「悪の凡庸さ」によって成り立っているのです。ホロコーストや原爆投下といった軍隊による悪魔的な所業を考えるならば、軍隊と戦争は、普通の人間をモンスターに変えるものだといえます。日本国憲法は、このような人間の弱さを深く自覚し、憲法9条によって戦争を放棄し、軍隊をもつことを禁止したのです。
4. その一方で、憲法は、人間に備わった良心と善意に信頼を置きます。第二次世界大戦中、杉原千畝さんだけでなく、歴史に名を残さなくても、死の際に立たされたユダヤ人を見過ごしにできず、彼らを命がけで救った、普通の人たちが大勢いました。その意味で、人間に備わった善、つまり人間の良心や善意もまた、「凡庸」に見えるほど当たり前だということです。だからこそ、日本国民は憲法前文において、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」のです。
5. 日本国憲法は、一方で人間の弱さを深く自覚しつつ、もう一方で、人間の良心と善意を信頼するものです。この日本国憲法の試みは、大げさに聞こえるかもしれませんが

が、世界において唯一無二の人類史的なプロジェクトです。だから、日本国憲法の平和主義のプロジェクトが、現代の凡庸な政治家によって止められることなどあってはなりません。私たちには、この平和主義のプロジェクトを将来の子どもたちに手渡す責任があります。それが世界にとっても希望になります。その責任を果たすために、今年もまた私は、皆さんとともに頑張りたいと思います。今年もどうぞよろしく願いいたします。